

# アメリカ報復攻撃、

## 北朝鮮ミサイル、

### 日本政府対応

本多静芳

落語の三題噺ではありません。今回から紙面に日本の浄土教の一僧侶（同時に大学教員）の呟きを載せて戴くことになりました。念仏者である私は、世俗社会を相対的に照らし出す原理である浄土という究極の平和と平等という境涯を生きる宗としています（というよりも、現実には浄土を宗とせず世俗価値を追い求めている私だということが浄土によって批判的に照らし出されているといった方が本来は適切でしょう。こつした表現は追々うなずいていただけたことと思います）。そのため、私にとっての「宗教生活」とは、常

に現実社会と自分がどのように切り結ばれるのかとか、現実社会に自分の考えはどう関わっているのかということやいのちの中のいのち（私の文脈ではこれをアミダ如来と呼びます）の本来の願いから問い直しをするという形で成立します。

一般に、宗教生活というと手を合わせたり、念仏を称えたりということや第一義的に思い浮かべることが多いとお思いでしょう。勿論、それも欠くことができないものであり、本来的にそれ自身が如来からの呼びかけであるというのが大乘仏教の構造であり、常に如来の本願との会話を生きている（言い換えれば、普遍的ないのちの願いとはどういうコトなのかということの確認作業を終わることなく続ける営みを頂いたのが念仏者というもの）ということなのです。

その如来と私たちの共通の願いは、いのちが他の都合のために手段とされたり、争いの

道具や蔑みの対象とされたくないということでしょう。具体的には、人間の誤った判断（上の題に掲げた問題状況においては、誤った政策ということです）によって「脳漿が飛び散り、眼球が飛び出し、腕がもぎれ、足は踏みにじられる」という出来事を回避したいということなのです。

アマミダ如来の願い（普遍的な宗教感覚）とは、私が気づく前に先だつてこのいのちの中のいのちの願いに気づかれたものの総称であり、その具体的なはたらきかけです。このことを私自身が主体的に受け止めれば、どれほどそのことを理念的に知っていても、果たしてそれを具体的に生きることが殆どできていない自分自身に気づかされることです。そこに宗教生活があります。

米国軍産複合体の姿がいのちの本来性に背くものと気づかされたが故に動く私も、宗教生活が自ずともたらず姿であるけれども、同

時にまだまだ多くのことに気づいていない自身に謙虚にならざるをえないところに如来真実との邂逅を思うのです。

さて近代的な視点は、物事は要素が集まって成立すると推論（理論ですからあくまで仮説）して、その要素を調べることで全体が説明できる（はずである）という要素還元主義的な発想に立つことが多くあるようです。

これはあくまでも、一つの考え方であつて現代人の持つ考えの全てではありません。しかし、この方法が全面に打ち出されることによつて、身のまわりの問題を客観的に、分析、判断、予想、統御することができるといふもの見方を近代社会の人は当然視してきたようです（例えば、わが身ひとつとっても、常識的に老い、病み、そして平均寿命前後で死ぬと思ひ、それに沿つた人生生活を立てています。天気予報もそうですね。もつとも普段

は、これを分析、判断、予想、統御何手しかめつらしい言葉は使いません)。言い換えればこれは、問題を自分の外側にあり、私と関わりのないものであるかのように他人事として扱うことのできる考え方だといえます。その意味で、(主体的な人間の生き方が問われないように思われてきた)科学技術の場面ではこの考えは非常に重宝なものとされました。しかし、「人間とは何か」、「生きるとは何か」ということに直面せざるをえない問題を扱うときに、この要素還元主義に立つ発想は殆どといってよいほど歓迎されません。

社会問題をこつした分析、判断、予想、統御する近代的な見方で解析する学問的な方法が生れましたが、人為による政治も、こうした客観的な方法を用いることが多いようです。つまり、現実認識をするとき、自己(この場合は自分の属する国家や仲間や他との関

わり)を棚上げして、客観的に出来事を見つめれば判断できるとするのです。今日、戦争を回避できるのは、世界の諸状況を要素に還元して考えることで、国家間の武力や様々な政治的力の均衡が保たれているからだという見方が生まれていきます。それで、武力によって現状を認識しようとするのは、実用主義的な見方としてとても受け入れやすいのです。

たとえば、アメリカが報復ミサイルを打ち込んだのも、何故米国大使館に爆弾テロがなされなければならなかったのかという自己の抱える問題を全くといってよいほど棚上げして、しかも自身は世界の警察国家であるかのように振る舞っているからこそできるのです。

しかし、ある存在は必ず他との関わりで生まれるある事象の中に成立しています。これは先にカッコの中に「関わり」という言葉で示したように、自己だけでなくあらゆる存在は他との関わりなしに存在していないもので

す。その関わり方を普段は自己の都合でしか見ていないという点において、お互いの本当の姿は事実を無視しているといえるでしょう。あらゆるものは他との関わりによって存在する事ができるといふ事実を昔からの言葉でいえば、「縁起」といいます。

要素還元主義は科学的とも呼ばれます。それは文字通り、科学ですから、要素の科に分けて分別して認識しようとしています。そして、それは同時に合理的な方法を要しますので、方法は経済的、効率的になります。言い換えれば、合目的で、高効率なあり方が求められる訳です。そして、結果として科学的で経済的なものが価値あるものとされるのです。

つまり、近代性は、「意図したものを善きものとして価値づけていきますが、縁起という事実を踏まえていえば、私の生きる「いのちの総体」の世界は「意図せざること」を

も包括したものだと思われかされます（もう少し、つつこんでいえば、私たちが「意図したこと」といつている事態も、実は「意図せざること」の中で、自分の都合の善いようになつたことをそう呼んでいるだけかもしれないですね。何しろ、すべてのことは相対的であって、100%確実なのは死ぬこと位ですからね。そうそう、絶対死なない方法というのが落語にあります。まして、答えは、「生まれてこないこと」です）。

しかし、私、仏教者はこのような視点から、こつした自己棚上げ論に「否」といえます。

北朝鮮がミサイルを打ちました。これに対して日本政府衆参両院は、全会一致で抗議声明を出しました。山崎政調会長がいうようにこれは憂慮すべき周辺事態です。しかし、同じように私たちの抗議声明は、米国大使館テロに対しては出せませんし、報復攻撃に対して

も出すことができません。もつと身近なところでいえば、核を保有し、それを日本に持ち込んでいるアメリカという外国に抗議声明を出せるはずです。憂慮すべき事態は、北朝鮮のミサイルに止まりません。ミサイルを防衛するはずの防衛庁（身内の防衛にやっきとなっていたのか、失礼、適切でない表現でした）のミサイル発表が遅れたことの方が憂慮すべき事態ではないでしょうか（米韓の方の発表が先です。だからといって武力の予算を増やせというのならヤブヘビです）。

それだけではありません、いざとなったら本当に危険な原発を国内で稼働させていること、ダイオキシンの問題を放置していること（私は所沢の住民としてそう思えます）、かつての熱狂的民族主義者を英霊として祭る靖国神社に国会議員という国家公務員が公式参拝していること、国家的な金融破綻に対して背任行為ともいえる往時・今日の議員・官僚・

関係者が責任をとらないこと、効率性でいのちを考えているために未だ息をさせ、拍動し、体温のある人間にメスを入れ臓器や手足を切り取って殺していること（「脳殺」は項を改めて論じます）など、私の周辺の憂慮すべき事態は数え切れません。しかも、それを当然のこととさせている状況は人間を非人間化させていきます。それはあたかも、戦中に私たちの都合を満たすために、日本国民に「どうか、神国日本が勝つため（自分の都合が満たされるため）、鬼畜米英が死にますように」と本気で臣民（この民という漢字の成立は眼のつくり、一本の棘が刺さり、盲の状態を意味するところから生まれたという背景をもつそうです）に考えさせた政策が誤りであったのと同じように、「どうか、私が生き残れるために、早く誰かが脳死という状態になってください」と人の死を望むことを人々に望ませる状況が今生まれているということです。

知っていて悪いことをするのと、知らずに悪いことをするのは、どちらが災いが大きいか？という問答が、『ミリンダ王の問い』（東洋文庫所収）にあります。

近代的な個人が、他から独立しているという思想に慣れていれば、当然、知らなければ責任はないのだからというところから発想するのでしよう。しかし、『那先比丘経』（ナーガセーナを漢字に音写してそのままお経の題名にした）とも名付けられるこの問答集には、思いがけない答えが示されます。

西洋の分析的な思考を代表するメナンドロス（ミリンダのギリシャ表記）王の問いに、インドの思想的代表とされた仏教の長老ナーガセーナは、縁起に基づく見解を示し、知らずに悪いことをした方が災いが大きい、何故ならばとインド哲学では常套手段である譬えをもって説きます。

もし、知っていて熱した鉄の玉を触るのと、知らずに触るのではどちらが火傷が大きいですかと逆に王に訊ねるとそれは知らずに触る方が火傷が大きいと返事があり、そうです、そのように、知らずに悪いことをした方が災いは大きいと説明を終えるのです。これだけの問答が文献として遺っているというところは、このやりとりで往時、かの地の人々は領けたということでは、今の私たちは？

ここには、次のような思いが言わずもがなということと語られていないのです。つまり、知らずに悪いことをした場合、その悪しさを自覚できず、反省もできず、ついには慚愧すらできずに悪業をしたままになってしまつたという発想が背景にあるのです。知っていれば、それに気づき、慚愧して人間性を回復することが可能です。

これは、仏教に限らず「意図せざるもの」を容認していく立場の基本といえるでしょう

(つまり、知ることすら意図した通りにならないものを抱えている自分の発見と、そのことに対する謙虚な容認です)。ここから、自分で殺すのと、他人に殺させるのでは、どちらが罪が深くなるかという問いすら生まれています。どうです、昨日食べた豚カツの豚君の屠場での姿を思い浮かべることができまして、それはすばらしいことです。心に慚愧が生まれて、本当によかったですね。と大乘経典は説くのです。

今から約二百十五年前に石見(今の島根県)の有福の地に善太郎という人が生まれました。有福の地は、多くの深い生き方をした念仏者(妙好人と呼ばれる)が世に出た所です。善太郎さんも、ご縁に恵まれ、いや恵まれたご縁をしつかりとただかかれた方でした。これは善太郎さんがお念仏の教えに頷かされてからのことです。

夏の暑い日、山の下草刈りに朝早くから出かけ、日が落ちてから家路に着きました。

「今日もお陰さまで、一日働かせていただいた。ありがたいことだったなあ」と感謝のお念仏を称えながら家路に着き、勝手口から家に踏み込んだそうです。お念仏の教えというのは不思議なもので「ないもんほしがらんで、あるもん喜ばせて貰おうよのう」(山口県萩市の河村ふでさん)という生き方を恵まれるといえます。今、ここにある私がそのまま頂戴できる領収書が、念仏を頂くということだといえます。生産性と経済性が最大の関心事となっている世界を好んでいるところという生き方とは随分遠いところにいるようです。

ところが、台所に一步踏み込んだ途端に、先ほどのお念仏が吹っ飛んで、変わりに小言がでたというのです。それは、妻のオトヨさんが今頃になっても夕食の支度をしておらず、しかも行水のお湯を沸かしていなかったから

です。ところが、オトヨさんもどこか虫の居所が悪かったのでしょうか。小言を言い返しました。善太郎は、癩癩玉が破裂して今持つて帰った薪を振り上げたのです。オトヨさんは庭に逃げ出します。遂にオトヨさんが追いつめられ頭を抱えてかがみ込んだところに善太郎が薪を振り下ろそうとした時、その善太郎に届いてくれたコトがありました。善太郎の口について、ナンマンドブと如来様の呼びかけが出ました。善太郎は力萎えてしまいました。泥足のまま母屋に上がり、お内仏の扉を開け、お明かりをあげ、薪を仏前にお供えし、「ナンマンドブ、善太郎が出ました。また、善太の自性ができました」と言ってさめざめと涙しながらお念仏したそうです。

もし、善太郎に如来様の呼び声が届いていなかったらどうしたでしょう。振り下ろした薪は、オトヨさんの頭から血を流したかもしれません。いきり立っている善太郎は、「ざ

まをみる。俺の言うことを聞かん奴はこうなるんだ」と息巻いたでしょう。しかし、床についてからも、「痛い、痛い」と呻く姿にいつまでも、ふんぞり返っておれないのが、連れ合いというものです。なんで、あそこまでしてしまったのだらうと、後悔にくれていたかもしれませぬ。しかし、善太郎には日頃の聴聞を通して、呼びかけてくれるいのちの中のいのちそのもの（如来）の願いが届いてくれているお陰で転ぜられる世界を賜っていたのではないのでしょうか。呼びかけの届くところには、そうか、そうか、女房には女房の都合があつて食事の支度も遅いのだらう。今日は、水で行水をさせて貰つて、夕食の支度ができるまで、お夕事のお勤め（お参り）をさせて貰おうと転じる世界が開かれています。

手を振り上げた人にどうすれば届くのかと仏教に答えを求めようとするのは、近代的

な思考に慣れたからです。固定的な答えがあると思っています。つまり、こうしておけば「意図したこと」が生まれるだろうと考えるのです。善太郎が腹を立てたのも、お念仏が届いてくれたのも、どちらも「意図せざる」と「であります」。「意図したこと」という答えはありません。あるのは、み教えを聞く今の私が生き方を作るということのみです。仏教に触れたら問い（願い）が生まれ、行動（実践）が生まれるのです。「意図された」問い（願い）すら求めるのが近代知といえるでしょう。

今の私が、念仏との出遇いにより気づかされたのは、「ひとつひとつのいのちはかけがえないということ。それに対して、科学的で経済的な近代の思考は、いのちを何かの目的のために道具や手段にすること。すると、人のいのちは、一部の人間の都合を満たすために、血が流れ、そのことに涙を流し、ケ口

イドは残り、乙女の生涯はズタズタにされること。

気づかぬことは、『あの時はしかたなかった』という生き方を作りやすいこと。今、いのちを手段化する争いを見過ごすこと。非戦の立場、さらに踏み込んで悲戦という視点に立てずに、戦争や人権を踏みにじる差別を肯定する諸状況を生み出してきたということ。それは仏教の名前で人々を戦争に駆り立てた過去を持つということ。気づいたものは非戦（悲戦）という視点に立って動くということ。念仏とは心の中の自己陶醉ではないということ」です。

今、私動いています。ナンマンダブ。